

# 小学校教育実習生の実態調査について

－小学校教諭を目指す本学学生の実習前後の変化－

田中 るみこ<sup>(1)</sup> 石田 靖弘<sup>(2)</sup> 橋本 義徳<sup>(3)</sup>  
野上 俊一<sup>(4)</sup> 岡田 充弘<sup>(5)</sup> 平田 繁<sup>(6)</sup>

## A Survey on the Effectiveness of Teacher Training to the Faculty Preparing for Teaching in Primary Schools

Tanaka Rumiko<sup>(1)</sup> Ishida Yasuhiro<sup>(2)</sup> Hashimoto Yoshinori<sup>(3)</sup>  
Nogami Shunichi<sup>(4)</sup> Okada Mitsuhiro<sup>(5)</sup> Hirata Shigeru<sup>(6)</sup>

### I. 問題と目的

本学教育学部では、小学校教員免許取得希望者は3年次後期に4週間の小学校教育実習を履修している。小学校の教育実習先の学校は、福岡県近郊を中心に九州各県などを含めた、公立小学校の110校以上が毎年教育実習の実習校になっている。

教育実習とは、各学校の教諭（養護教諭および栄養教諭を除く）の免許状をはじめ取得する際に行うものであり、教育職員免許法第5条・別表第1、教育職員免許法施行規則第6条の規定により定められている。また、教員免許を取得するために必要な「教職に関する科目」の一つであり、教職課程を設けている教員養成系大学においては、教育実習校での2週間から4週間程度の実習ならびに事前事後の指導を含めて「教育実習」科目として開講している。

教育実習の実習校の選定については、母校や居住地近郊の学校に実習の前年度に学生個人が受け入れを依頼し、内諾を取り、実習年度に大学側から正式に依頼することになっている。しかし、学校は教育実習生を受け入れる義務はなく、学校行事等の兼ね合いやその他の理由により、実習受け入れを断ったり、時期を指定して受け入れたりするなど様々である。

近年の小学校教育実習において、教育現場の多忙さなど諸々の理由により、十分な実習受け入れ態勢を整えられない場合もあり、教育実習の指導方法も各実習校の校長を中心とした指導担当教員へ一任している。大学の事前指導については、事前オリエンテーション2回、「小学校教育実習指導Ⅰ」、「小学校教育実習指導Ⅱ」、その他全教科の授業を受講し、模擬授業や学習指導案の書き方など、小学校教育実習に関わる基礎的な学習を修めている。

大学の事後指導については、実習の振り返り（省察）、報告会、個別相談、現任教員を講師とした教育講演会などを実施している。

教育実習を終えた学生の様子を見てみると、教職の志望意識が強くなったり、生活態度が好転したり、教職課程の授業に積極的に参加する姿がみられる。しかしながら、若干の学生は逆に教職の志望意識が低くなり、落ち込んだ様子もみられていることから、教育実習後の報告会や個別相談を通して、事後指導に力を注いでいるところである。このように、実習後に学生の様々な様子から、学生の学習指導の体験や査定授業、教職に就きたい気持ちの変化など教育実習の現状把握が必要である。そこで、本研究は小学校教育実習後にアンケートを実施し、本学の小学校教育実習の現状について明らかにすることを目的にする。また、その結果から今後のアンケート調査項目の改善について提案する。

### II. 方法

#### 2-1 調査対象と調査時期

平成25年度から平成27年度の本学教育学部の小学校教員免許取得希望の3年生339名（平均回収率92%）を対象とした。調査時期は小学校教育実習後の「小学校教育実習指導Ⅱ」の最初の授業でアンケートを実施した。

平成25年度 実習生122人回答（実習生131人（回収率93%））

平成26年度 実習生106人回答（実習生120人（回収率88%））

平成27年度 実習生111人回答（実習生115人（回収率96%））

2-2 実習期間

平成25年度 9月24日～10月18日

平成26年度 9月24日～10月17日

平成27年度 9月28日～10月23日

2-3 調査項目

質問項目は、実習校の都道府県名、学期制、教科や領域、査定授業などについて9項目を設けた。質問1では実習校の都道府県名について設問した。質問2・3では実習校の学期制や配属学年について設問した。質問4・5では体験した教科や領域の授業時間数、査定授業の教科や領域、査定授業の教科を選択した理由について設問した。質問6・7・8では教育実習前後を比べて教職につきたい気持ちの変化、教師の力量、実習を通して学生自身の考え方や生活態度の変化について設問した。質問9では、今後の進路について設問した。

Ⅲ. 結果と考察

3-1 実習状況について

本学は福岡県市内に位置しており、学生は福岡県近郊を中心に九州各县などの出身者が多い傾向がみられている。そのため、小学校教育実習先は、居住地から実習先に通いやすい本学周辺や地元出身校を希望していることが多い。アンケートの結果、図1に示す通り、実習先の全体年度平均は福岡県が54%以上という傾向がみられた。次いで、佐賀県や熊本県を希望する傾向がみられた。本学学生は、例年、地元で教育実習を希望し、教職に就きたい希望を持っている傾向がみられていた。本研究のアンケート結果から、本学学生の教員採用試験を受験する都道府県をみても、これらは学生の出身県とほぼ合致する。このことから、地元で教職に就きたいという学生の強い意志の持続がみてとれる。

実習校の学期制については、近年の傾向として3学期制から2学期制へ移行している様子が見られているが、学期制は各市町村に一任されているのが現状である。ア

ンケートの結果、図2の通り、本学学生の実習校は各年度ともに70%以上が3学期制であった。年度別や地域別にみても、2学期制や3学期制は市町村によってばらつきがあり、その割合はほとんど変わらなかった。実習先の実習時期をみても、2学期制の学校に教育実習を希望した場合、13/21校(61%)の実習校は10月初旬に2学期が始めるため、本学が設定した実習期間を1カ月ほど前後して実習を開始していることがわかった。このことから、次年度の実習時期の見直しについても検討することが必要である。

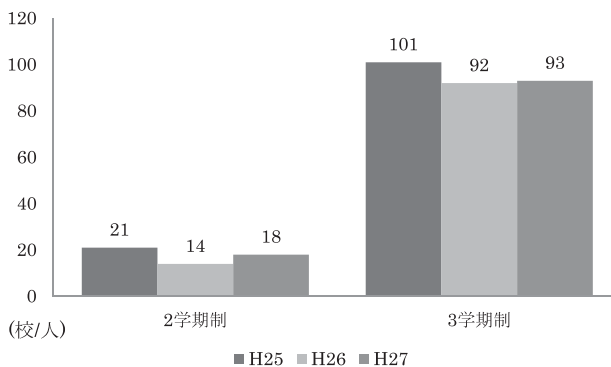


図2 実習校の学期制

実習校の配属学年については、過去3年間の平均値を図3に示す。一番高い割合は4年生(27%)と2年生(23%)であり、やや高い割合で示されている。次に1年生(15%)、3年生(15%)、5年生(13%)はほぼ横ばいの割合で示されており、一番低い割合は6年生(7%)であった。年度別や地域別にみると、ややばらつきは見られるもののほとんどその割合は変わらなかった。実習生の小学校教育実習後のアンケートを実施した福田(2008)や松崎(2008)の先行研究では、中学年(3・4年生)の割合が高かったが、本研究では4年生と2年生がやや高く示されていた。配属学年の決定については、持ちあがりの学年、担任の配置など様々な理由があるため、一概には結果を述べることは難しい。今後、実習校の配属学年の決定についての項目を設けて、詳細なアンケートを作成する必要がある。

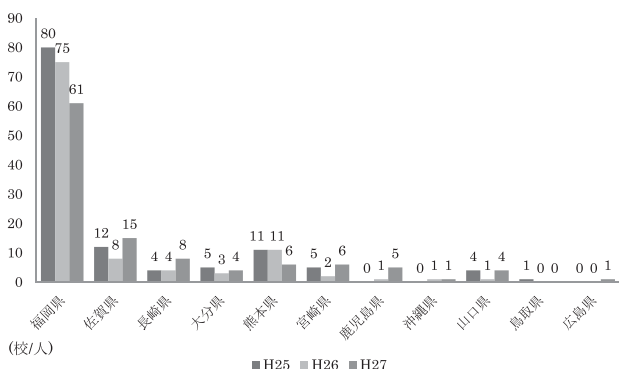


図1 実習校の都道府県

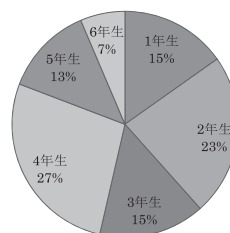


図3 配属学年

### 3-2 学習指導の体験

本学学生の学習指導の体験は、全期間を通して、各教科、道徳、特別活動、総合的な学習の時間の指導を実習校の実情に応じて10時間以上体験ができるように依頼をしている。また、できれば一つの単元を通して学習指導をする機会、第3～4週において半日・全日の学級・学習指導の機会も合わせて依頼をしている。学習指導に当たっては、事前に学習指導案を作成して実習校から指導を受けることを事前指導している。図4は実習校での授業時間数を教科別、年度別に示したものである。授業時間数と教科や領域は、小学校の実情や学生の力量などから個人差はあるが、全年度ともに国語と算数の割合が高い傾向がみられた。同一の項目を設問した福田（2008）や松崎（2008）らの先行研究においても、学習指導の体験は国語と算数の割合が高く、本研究と同様の結果であった。アンケート実施により、本学学生の98%が国語と算数のいずれかの学習指導の体験をしていることがわかった。また、学生によっては一単元を最大10時間以上学習指導している場合もみられた。年度別にみても、地域や個人間の差はほとんどみられなかった。

査定授業の教科や領域については、図5に示す通りである。教科別、年度別にみても国語と算数の教科に集中しており、特に算数は最も多い傾向がみられた。年度ごとでは、平成25年度の算数は69名（平均56%）が最も多く、半数以上を占めている。全体年度の総合では、算数は187名（平均46%）が査定授業を行っている。次点の国語についても、全体年度の総合は77名（平均19%）で多くの時間数に学習指導を行っていた傾向がみられた。微増ではあるが、社会、理科、体育は年度ごとに増えている傾向がみられた。また、生活科、音楽、図工、道徳は、数年ごとに微増減している傾向がみられた。過去3年間において、査定授業の機会が全くなかったのは、家庭科、外国語、総合的な学習の時間であった。

教育実習の集大成である査定授業の教科や領域を選択した理由は、図6に示す通りである。査定授業の教科や領域の選択については、平成25年度の「1番やりやすかったから」61名（平均50%）の項目が最も多い傾向がみられた。全体年度の総合をみても、「1番やりやすかったから」、「1番興味のある教科や領域だから」、「子どもの頃得意だったから」の項目順で多い傾向がみ

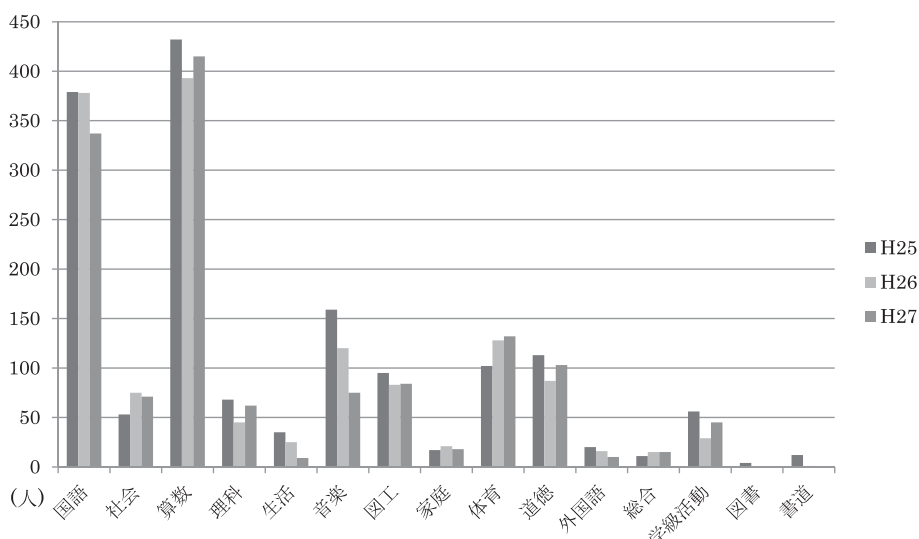


図4 授業時間数と教科・領域

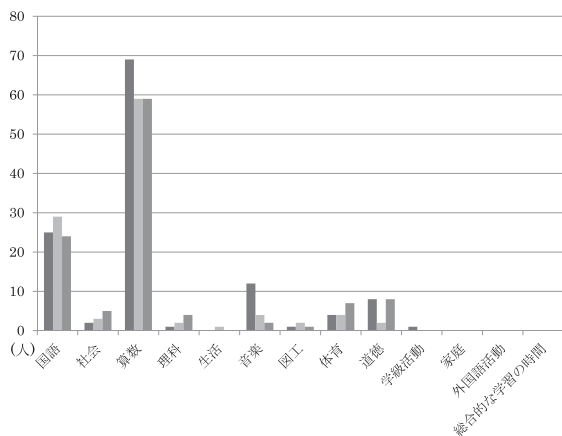


図5 査定授業の教科や領域

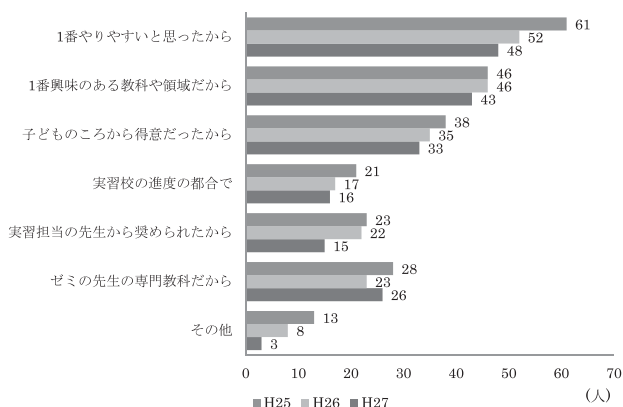


図6 査定授業の教科や領域を選択した理由（複数回答）

られた。選択の意思については、実習校の進捗、担任の奨め、ゼミの先生の専門教科で決定している場合も見られているが、約半数は学生の希望する教科で行われていた。

### 3-3 教職に関する意識の変化

教育実習後に報告会や個別相談の際、教職に就きたい意識について、学生より様々な意見が出された。実習校での様々な経験から学生がどのような変化がみられるのか項目ごとに回答を得た。図7に示す通り、全体年度として262人（平均65%）の学生が「教師になりたいという気持ちが強くなった」と回答した。「教師になりたい気持ちに変化はない」では、50人（平均12%）の学生が教育実習後も変わらずに気持ちの変化がないことを示している。「教師になりたい気持ちが下がった」では、27人（平均6%）の学生が回答しており、教育実習後に教職に就きたい気持ちの減少がみられた。

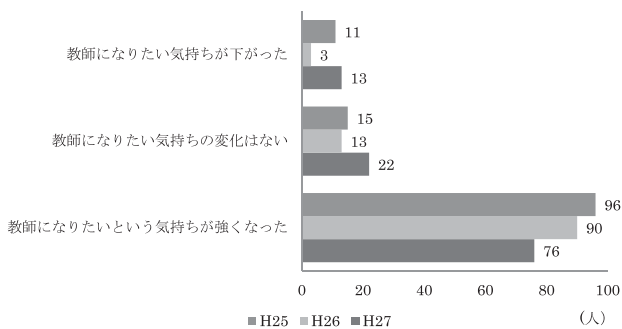


図7 実習後の教職に就きたい気持ちの変化

「教職に就きたい気持ちが下がった理由」については、図8に示す通り、該当者のみ選択肢と自由記述で回答した。平成25年度は「教師の仕事量が多いから」（9名）、「子どもの教え方がわからないから」（5名）、「授業の準備が大変だから」（4名）の順で多く回答していた。平成26年度では、微量ではあるが「授業の準備が大変だから」（2名）、「子どもの教え方がわからないから」（1名）、「教師の仕事量が多いから」（1名）の順で回答していた。平成27年度では、「教師の仕事量が多いから」（6名）、「力量・自身がない／怖くなった」（5名）、「授業

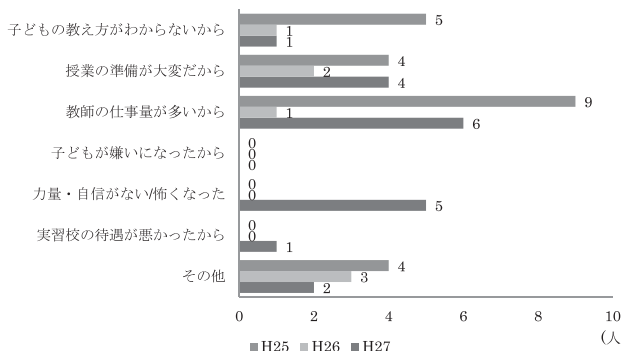


図8 教職に就きたい気持ちが下がった理由(該当者のみ回答)

の準備が大変だから」（4名）、「実習校の待遇が悪かったから」（1名）の順で回答が多い傾向がみられた。全体では、「子どもが嫌いになったから」と回答した学生はいなかった。なお、平成27年度のみ「力量・自身がない／怖くなった」、「実習校の待遇が悪かったから」の項目を設けた。

「教職に就きたい気持ちが上がった理由」については、図9に示す通り、該当者のみ選択肢と自由記述で回答した。平成25年度の「子どもが可愛いと思ったから」84名（平均68%）が一番多い傾向がみられた。年度別平均では「子どもが可愛いと思ったから」、「分かった」「できた」という喜ぶ姿をみてから、「子どもの可能性を感じたから」、「教えるのが楽しいから」の項目の順で多く回答した。年度別の差はほとんどみられなかった。

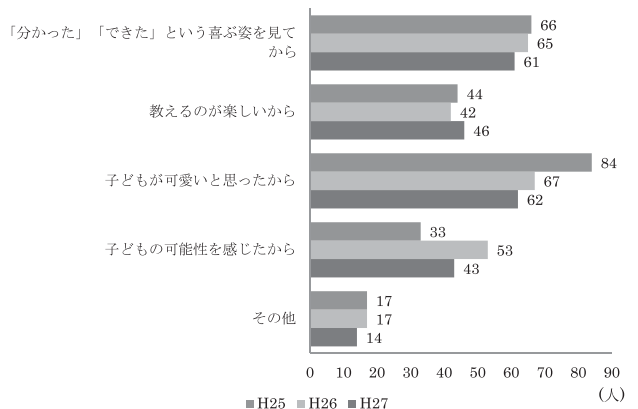


図9 教職に就きたい気持ちが上がった理由(該当者のみ回答)

「教師の力量として重要だと思うこと」については、図10に示す通り、平成27年度のみ選択肢（3つ選択）で回答した。平成25年度の「わかりやすく授業を展開していく力(教材の組み立て、話し方、板書など)」79名(64%)が一番多い傾向がみられた。年度別平均では、「わかりやすく授業を展開していく力(教材の組み立て、話し方、板書など）」、「子どもの学習の状況、悩み、要求、生活状況等を適切に把握する力」、「子どもに積極的に関わっていく熱意や態度」の順で多く回答した。年度別平均の差はほとんどみられなかった。

「実習後の学生自身の考え方や生活態度の変化」については、表1に示す通り、平成27年度のみ、自由記述で回答した。「常に見られている生活態度を心掛ける」（19人）、「教師になりたい気持ちが強くなった」（14人）、「早寝・早起きができるようになった」（8人）の回答が上位3つである。特に教育実習は地元の出身校で実習を行っている場合が多く、近所で顔見知りになる関係上、いつ・どこでも「常に見られている」意識を持つように感じた学生が多くみられた。また、「教職に就きたい気持ちが上がった」項目においても同様に、教育実習後に「教師になりたい」という気持ちが強く感じる学生も多



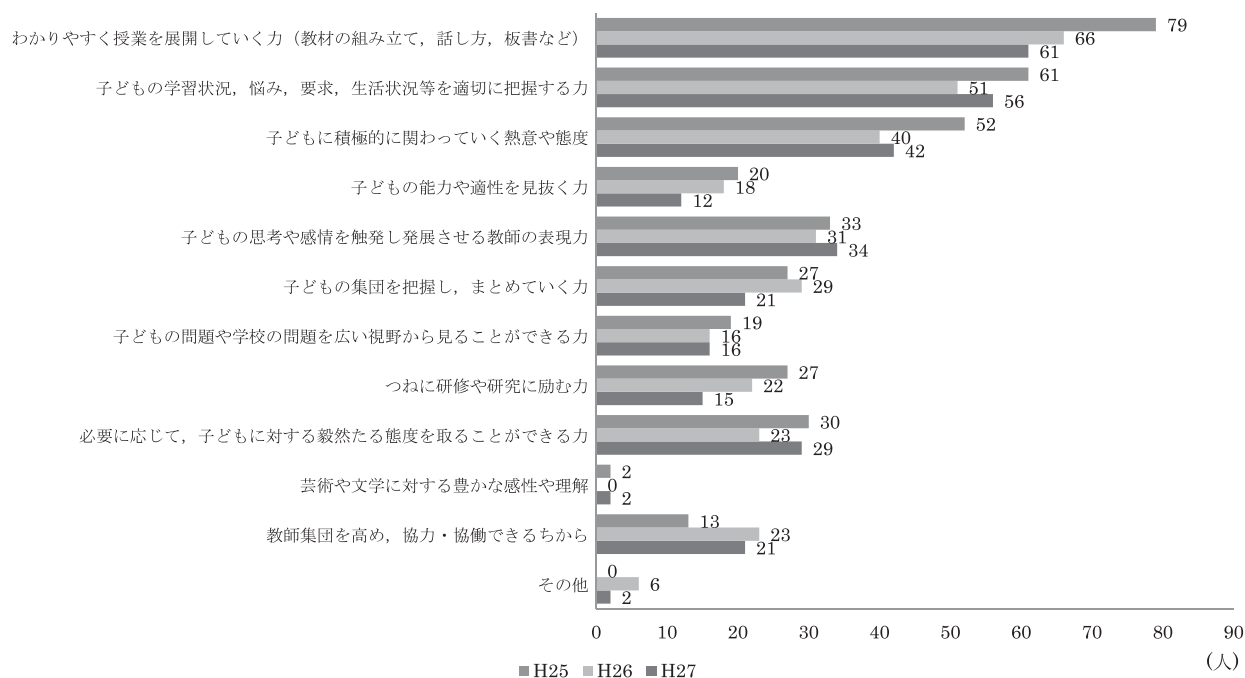


図10 教師の力量として重要と思うこと (H27年度のみ回答 3つ選択肢)

くみられた。更に4週間の教育実習度, 「早寝・早起き」の習慣が身に付き, 生活態度の好転がみられた。その他では, 「子どもの手本になる」, 「時間を効率よく使うようになった」, 「他者意識をもつ」, 「正しい日本語・挨拶をする」など, 学生自身が自分を律していく意識が芽生え始めた傾向がみられた。また, 「勉強が足りず, 力不足を感じた」, 「担任の大変さを知り, 不安を感じた」など学校現場の大変さを感じた学生もみられた。今後につ

いては, 「教採の勉強を始めた」「子ども理解・子どもに関わる機会を増やしたい」など, 学生生活の中でできることを考えた学生もみられた。

「今後の進路」については, 図11に示す通り, 平成27年度のみ複数で回答した。個人間の差では, 「教職に就きたい気持ちに変化はない」, 「教職に就きたい気持ちが上がった」と回答した学生96人(86%)は「小学校教諭」のみ回答していた。「教職に就きたい気持ち下がった」と回答した学生は「小学校教諭」, 「会社員」, 「その他」に複数回答しており, 学生の進路に対する迷いがみられた。進路に迷いがある学生に対して, 事後指導で個別相談や学生の話し合いができる機会を設けて, ケアや指導を行っており, 学生が随時相談できるよう支援体制を整えている。教育実習後に学生の104名(小学校教諭96人, 特別支援教諭6人, 幼稚園教諭2人)(93%)の学生が教員志望を希望しており, 教員志望率が高いことが明らかにされた。アンケートの結果により, 小学校教育実習後, 更に進路に対する意識が高まったことが示された。

表1 実習後の学生自身の考え方や生活態度の変化 (H27年度のみ回答 自由記述)

人数	内容
19	常に見られている生活態度を心掛ける
14	教師になりたい気持ちが強くなった
8	早寝・早起きができようになった
7	子どもの手本になる
7	子どもの良さを感じ, 学級経営づくりを行いたい
7	時間を効率よく使うようになった
7	勉強が足りず, 力不足を感じた
7	子ども理解・子どもに関わる機会を増やしたい
6	他者意識をもつ
5	教採の勉強を始めた
5	教師のやりがいを感じた
4	担任の大変さを知り, 不安を感じた
4	目標をもち, 自分の引出を増やす
3	正しい日本語・挨拶をする
3	教師の連携の大切さがわかった
3	自分の良さを感じるようになった
3	周りの目や評価を気にしない
3	先を見通す力を養う
3	教師としの人間力を養う
2	学校のイメージが変わった
7	その他

#### IV. まとめと今後の課題

平成25年度から平成27年度までの3年間において, 本学教育学部の学生の小学校教育実習後のアンケート分析を行った。その結果, 小学校教育実習先は, 各年度ともに福岡県が54%以上という傾向がみられた。教育実習の実習校と教員採用試験の受験をする都道府県はほぼ合致した。実習校の学期制は, 各年度ともに70%以上が3学期制であった。2学期制の学校に教育実習を行う場合には, 61%の学校が本学の定めた実習期間より1カ月前後

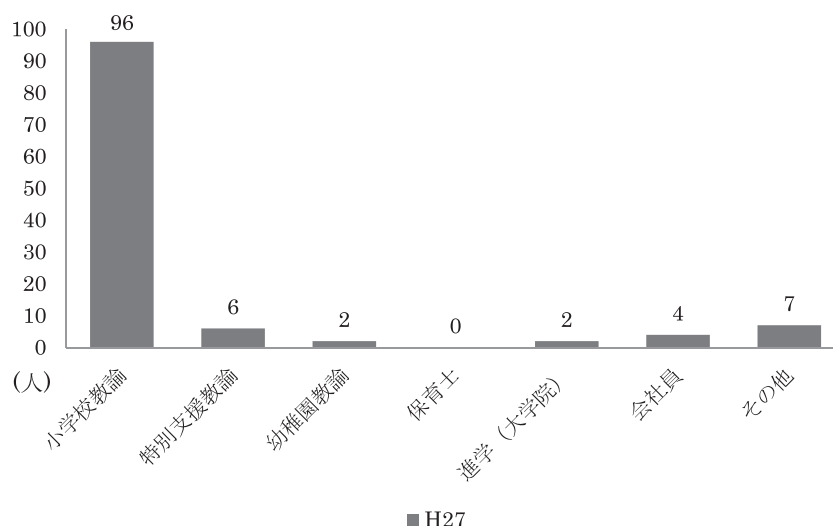


図11 今後の進路 (H27年度のみ回答 複数回答)

して実習を開始していた。配属学年については、全体平均で4年生(27%)と2年生(23%)がやや高い割合が示された。授業時間数と教科や領域は、全年度ともに98%の学生が国語と算数のいずれかに学習指導の体験をしていることがわかった。査定授業の教科や領域は、全体年度の総合で算数が187名(平均46%)で最も多い傾向がみられた。査定授業の教科や領域を選択した理由については、「1番やりやすかったから」、「1番興味のある教科や領域だから」、「子どもの頃得意だったから」が上位3つの項目であった。選択の意思については、約半数は学生の希望する教科で行われていた。実習後の教職に就きたい気持ちの変化については、全体年度として、262人(平均65%)の学生が「教師になりたい気持ちが強くなった」と回答し、27人(平均6%)の学生は「教師になりたい気持ち下がった」と回答した。「教師になりたい気持ち下がった理由」として、平成25年度は「教師の仕事量が多いから」(9名)、「子どもの教え方がわからないから」(5名)、「授業の準備が大変だから」(4名)の順で多く回答されていた。平成27年度では、「教師の仕事量が多いから」(6名)、「力量・自身がない/怖くなった」(5名)、「授業の準備が大変だから」(4名)、「実習校の待遇が悪かったから」(1名)の順で回答が多い傾向がみられた。全体では、「子どもが嫌いになったから」と回答した学生はいなかった。「教職に就きたい気持ち上がった理由」の項目は、平成25年度の「子どもが可愛いと思ったから」84名(平均68%)が一番多い傾向がみられた。「教師の力量として重要だと思うこと」については、平成25年度の「わかりやすく授業を展開していく力(教材の組み立て、話し方、板書など)」79名(64%)が一番多い傾向がみられた。実習後の学生自身の考え方や生活態度の変化については、「常に見られている生活態度を心掛ける」(19人)、「教師に

なりたい気持ちが強くなった」(14人)、「早寝・早起ができるようになった」(8人)が上位3つの回答であった。今後の進路については、平成27年度の個人間の差は、「教職に就きたい気持ちに変化はない」、「教職に就きたい気持ち上がった」と回答した学生96人(平均86%)は「小学校教諭」と回答していた。「教職に就きたい気持ち下がった」と回答した学生は「小学校教諭」、「会社員」、「その他」に複数回答しており、学生の進路に対する迷いがみられた。平成27年度において、教育実習後に学生の104名(小学校教諭96人、特別支援教諭6人、幼稚園教諭2人)(93%)の学生が教員志望を希望しており、教員志望率が高いことが明らかにされた。

今後の課題として、本学学生の実習の実態を知り、改善する上で教育実習後に教職に就きたい気持ち下がった学生に対して、実習中の学校現場の様子や学生自身の資質、学ぶ意欲などの記述欄を設ける必要がある。また、配属学年については、実習生が把握している範囲で、なぜその学年・クラスに配属されたのか理由づけする項目を設けたい。更に実習中の生活状況(睡眠時間、出勤・退勤時間、授業準備等)、実習の受入状況など詳細な設問を設ける必要がある。以上のことを踏まえて、今後も学生の教育実習の充実を図るためにも、アンケートの質の向上を目指し、調査を行っていきたい。

#### 【引用・参考文献】

- 福田啓子・中村浩子、(2008) 小学校教育実習における現状と展望(Ⅱ)、東京家政大学研究紀要、第48集(1)、83-88  
 松崎康弘、(2008) 本学教育実習生の小学校教育間-教育実習事後指導アンケートの記述から-、鹿児島女子短期大学紀要、第43号、211-221